
山猫の幸運

ラーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山猫の幸運

【著者名】

ラーセン

【あらすじ】

一匹の山猫がお腹を空かせておりました。

一匹の山猫がお腹を空かせておりました。

毛並みの悪い山猫はここ数日、何も食べておりません。

鬱蒼とした深い森。木々の梢がかさかさ揺れて向こうの先には蒼い空。微かにお日様が顔を出し、露濡れ草がきらきら光つておりました。

山猫は、苔を踏みしめ石を飛び越え少ない元気を振り絞り、森の奥へと行きました。

遅い春を迎えた森は小さな命が芽吹く頃。山猫もお家に帰れば三匹のかわいい子猫が待っています。

ですがご飯がありません。かわいそうな子猫たちはお腹を空かしておかあさんの帰りを待っています。

行く先に湖が見えました。森がぽつかりなくなつて、かわりにつきな蒼い板が黒い森を映して静かにたたずんでいます。

山猫は水際に近づいて水面に映った自分の顔を見つめました。痩せた顔がゆらゆらしています。山猫は自分の顔に口をつけ、ペロペろと水を舐め始めました。

……バサバサバサ

澄んだ空氣に通る音。灰色のものが水面に映りました。山猫が顔を上げると数十羽の鳥が空を飛んできます。

青空を埋めるように大きな鳥たちが力強い羽ばたきで空を舞い、ゆっくりと湖に降りてきて、波紋が広がり消えていきます。

クワアクワア

渡り鳥です。春になると南の空からやつて来るのでです。彼等は長旅の終わりとお互いの無事を喜び合つようになに鳴いています。

クワアクワア

腹を空かせた山猫は茂った葦の隙間からそんな彼等を見ています。じつと離さず見ていています。据えた瞳は真っ直ぐに鳥たちを見ていま

す。お腹が空いているのは彼女だけではないのです。

這うようこじりじりと近づいていきます。こじり寄りこじり寄り
こじり寄り……、

クエツー！

一羽が高く鳴きました。するとビーブショウ。和気藹々としていた鳥たちが一瞬にして静まりかえり、羽音を残して一羽残らず飛び立ちました。

山猫は茫然としたままそれを見送るだけ。残ったのは揺れる水面と空いたお腹だけでした。

田の前に空が広がっています。空には薄い細切れ雲と白いお日様だけがありました。

そこに灰色の鳥たちが青空を横切るように飛んでいきます。

クワア クワア

鳥たちは眼下に広がる黒い森を見渡しながら先程の危険について鳴きあつていました。

ああ、あぶなかつた。ほんと、あぶなかつたね。やつとやすめるとおもつたらすぐこれだもん。ほんとほんと。それにしてもあのねこはぼくたちをつかまえられるとしてもおもつたのかね？ そうだよなあんなやせたねこにぼくたちがつかまるわけもないよな。そうそう、あんなじべたはいにぼくたちがつかまるわけないない。おろかなねこだ。ははは、ははは、ばかねこだ。ははは、ははは。

鳥たちの鳴き声は澄んだ空を通り抜け広く森中に響きます。

ほりほり、したをみてじらん。あのねこのまぬけびり。ははは、ははは、まけねこだ。ははは、ははは。

森の一角の丸い穴。きらきら輝く湖のほんの片隅にうずくまる小さい猫。鳥たちの方をしばり眺めて、やがて首を向け森の中へ悄然と消えていきました。

ははは、ははは。

鳥のクワクワク鳴く声がしばりへ空を覆つていました。

ここに一羽の鳥がいました。みんなからはテンと呼ばれています。テンは背中に斑点模様があるので。だからみんなはテンと呼びます。

テンには夢がありました。

それは空に浮かぶお日様のところまで飛んでいくことです。

なぜならお日様はあつたからです。

テンやみんなは渡り鳥です。冬には南の暖かいところまで飛んでいかねばなりません。そこは遠い遠い南の国です。渡るのはとてもとても大変です。

あるときテンは考えました。

お日様のあつたかいところに行けば、一年中そこで暮らせて大変な渡りをしなくて済むんじゃないか。子育ても簡単にできるし、ぼくらを襲う敵もない楽園があるんじゃないか。

そう考えました。

ですがそう仲間に話すと、

なにをいつているんだい。わたりはぼくらのじせんぞさまのそのまたじせんぞさまのそのまたさらにもかしのじせんぞさまからでんとうなんだぞ。たしかにわたりはたいへんだしきけんもあるけれどそれでもぼくたちはそれをふじゅうにかんじたりしてこなかつたじやないか。これからさきもそのまたさきもさらこそのかせむこいつしていきていくのがぼくたちにいちばんあつていいるんだよ。

と、言されました。

だけれどテンの気持ちは変わりません。それどころかどんどん大きくなつていきました。空を飛んでいるとき、テンの横にお日様の姿を見る度にその気持ちは大きく大きく膨れ上がつていいくのです。

そんなテンを仲間は笑いました。

ははは、ははは。テンのおどきばなしがまたはじました。おひたまのせばならいちねんじゅうあつたかくてたのしくしあわせにくらせるつて？ それじゃあよるにおひさまがしずんだらぼくたちはこごえてしまつのかい。やだやだこわい。ははは、ははは。

それでもテンの想いは変わりません。

今日も空の上に燐然と輝くお口様の姿を見ながら胸の内の想いを優しく奮しておつました。

きゅーきゅーきゅるきゅるきゅーきゅるきゅる
みやーみやーみゅーみゅーみやーみゅーみゅー

お腹が空きました。子猫たちはお母さんの足にか細い身体を擦りつけます。

ですがご飯はありません。

お腹の鳴る音をたてても、か細い声で鳴いてみても、「ご飯はどこに」もありません。

お母さんと三匹の子猫たちは大きな木の薄暗いうるの中、身を寄せ合つて震えていました。

田は既に落ちかけて、西の空が赤く燃えておりました。夕暮れの風が冷たく吹き抜けて森を揺らしていきました。やがて赤い火は消えて紫色の闇がしだいに空を覆つていきました。

空に星が瞬く頃。子猫たちは静かに寝息を立てていました。お母さんはしばらくその寝顔を見つめていました。そしてゆっくりと顔を上げうるの外に広がる星空を何の気なしに見上げると、空の片隅がきらりと光り、一筋の星の欠片が夜空を流れていきました。

テンはついに飛び立ちました。

大きな翼を力強く羽ばたかせ、大空に舞い上^{アガ}りました。

クワアクワア

仲間の呼ぶ声が聞こえます。

その声は必死にテンを呼び止めます。ですがテンは振り返りません。

テンは高く高く飛んでいきました。呼び止める仲間の声もしだいに小さく聞こえなくなつていきました。

目指すは空の果ての果て。燐然輝くお天道様。

高く高くどこまでも高く、遠く遠くどこまでも遠いその場所へ、テンは飛んで飛んでいきました。

大地が森がみるみる小さくなつていき、仲間のいる森の穴の湖も見えなくなつていきました。

黒かつたり緑色だつたり茶色かつたり灰色だつたりする大地が無限に広がつて空の端に消えていきます。

丸みを帯びた大地の端は空の端につながつて、そこから上は蒼の世界。ちらほら浮かぶ白い雲が間抜けそうにふわふわ流れています。

そして空の上の上。間抜けな雲の上の上。白い太陽が優しく光り輝いておりました。

バッサバッサバッサバッサ

テンは一生懸命羽ばたきます。

ゴウゴウゴウ

風が唸りを上げてテンの身体に吹きつけます。

バッサバッサバッサバッサ

ゴウゴウゴウ

バッサバッサバッサバッサ

ゴウゴウゴウ

ぽつかり空いた空の中、聞こえる音はこれだけです。

バッサバッサバッサバッサ

「ウウウウウウ

せつかり空いた空の中、あるのはテンだけ

。

おかしいです。とつてもとつてもおかしいです。

バツサバツサバツサバツサ

空を越え雲を越え高く高く飛んできたのに、お田様に近づいているのに、ぜんぜんあつたかくなりません。それどころか、

ヒュー ヒュー ヒュー

ぶるぶるぶる

風が吹きつけます。それがとつても冷たいのです。

ぶるぶるぶる

寒い寒い、テンは身体を震わします。

ずっと飛び続けたせいでしょうか、息苦しくもなつてきました。いつもの渡りの時には一日中飛んでいてもこんなに息苦しくなることはなかったのに。

ですがお田様にはだいぶ近づきました。お田様はしだいに低いところへと落ちてきたのです。

バツサバツサバツサバツサ

ですが喜んでばかりもいられません。このまま落ちていったらお田様は大地の底に消えてしまします。やつなる前にお田様のところにまでたどり着かなければなりません。

バツサバツサバツサバツサ

ヒュー ヒュー ヒュー

ぶるぶるぶる

テンは必死に羽ばたきました。

冷たい風に吹かれようとも、身体がぶるぶる震えようとも、必死に必死に羽ばたきました。

西の蒼い空がしだいに顔を変えていきます。ひとつとお田様を

迎える準備を始めているのです。

バツサバツサバツサバツサ

急げ急げ、空は頬を赤らめています。

バツサバツサバツサバツサ

急げ急げ、空はお日様を追つて紫色の衣に着替え始めています。

バツサバツサバツサバツサ

急げ急げ、空の片隅にまん丸黄色。空はお月様を迎え始めました。

ああ、ああ、ああ、

テンは首も切れんばかりに踊ります。のどはからから、翼は悲鳴を上げて今にも千切れんばかりです。

バツサバツサバツサバツサ

お日様が真っ赤に真っ赤に染まりました。一日の最後の力を振りつくすようにおつきくおつきく真っ赤に染まりました。

後もう少し。

お日様は首を後ちょっとと伸ばせば聞くところまで、後ちょっとと、後ちょっとと。

テンの田の前はすべて赤に染まりました。世界のすべてが赤色に空も大地も森も湖も雲もそしてテン自身も。

ああ、これがお日様の楽園なんだ。すべてのものがお日様の赤い光に優しく包み込まれて。

あつたかい。

。

日は暮れて、すっかり森は夜の内。

山猫親子はうろの中。輝く星の空の下、親子は体をすり寄せ合つて、寒い寒いと震えております。

きゅーきゅーきゅるきゅるきゅーきゅるきゅる
みやーみやーみゅーみゅーみやーみゅーみゅー

瘦せた子猫のか細い声どご飯を求めるお腹の音が、狭くて暗いう

るの内に寂しく響いておりました。

親猫は鳴く鳴く子猫の顔を舐め、つるの外の丸い月を遠く遠くに眺めました。

月はまん丸黄色い姿。小さな星を従えて、ほのかに森を照りし出し、ぼんやり虚ろに浮かんでいます。

月の光は静かだけれど、お田様のよつにあつたかくはありません。

冷たい光。

じさつ

それは突然降つてきました。

夜の冷たい土の上、冷たい光に照らされて、それは冷たい姿をさらしていました。

親猫は子猫を連れておもむろにひのきの中から出でました。
長い首した丸いもの。辺りに散らばる灰色の羽。

それに山猫親子は喰らいつきました。

はぐはぐむしゃむしゃはぐはぐはぐ

舌に広がる肉の味。

はぐはぐむしゃむしゃはぐはぐはぐ

お腹があつたかくなりました。

はぐはぐむしゃむしゃはぐはぐはぐ

もうお腹は鳴りません。

山猫親子は身を寄せ合って仲良いくつらの中へと帰つていきました。

みやーみやーみゅーみゅーみやーみゅーみゅー

うるの内から幸せな声が聞こえてきます。

夜の冷たい土の上、冷たい光に照らされた、白い姿がぼつとひとつ。

(後書き)

フロッピーの最終保存日が2002年。
もはや何を思つて書いたのか作者も思い出せません。
結構やるせない話の童話風作品でした。

いやー、本当なんなのだろうか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8662n/>

山猫の幸運

2011年6月18日18時41分発行